

「知る」と「信じる」こと

——崔載瑞の国民文学論における「信念」の位相¹

Between Knowledge and Belief: The Status of ‘Belief’ in Choi Jae-Seo’s Theory of National Literature

金 景彩

KIM, Kyonche

0. 植民地における「事実の世紀」

植民地末期の朝鮮の思想的状況を語るために用いられる概念の中に「事実」がある。それは、日中戦争勃発（1937年）、第3次朝鮮教育令による皇民化教育の強化（1938年3月）、第1次近衛内閣による国家総動員法の制定と施行（1938年4月、5月）などの出来事を受け、「日本」という圧倒的な「事実」をいかに処理するかという問題が、植民地朝鮮の知識人の間において本格化したことによる。黄鎬徳によれば、戦争と日本精神というものが日本（浪漫派）にとっては「存在するすべてを否定するイロニーの対象」＝「巨大な浪漫」であったことに對し、「帰るべき祖国が存在しなかった」植民地朝鮮の知識人にとってそれは「政治的リアリズム」、すなわち受け入れざるをえない「国際法上の「事実」に他ならなかった²。帝国日本の存在が逆らうことのできない「事実」として表象され、その存在を受け入れざるを得なかった植民地知識人の思想的困難が、この「事実」という概念に凝縮されていたと言える。「事実」という概念は、当時の知識人が、朝鮮が置かれた状況を言語化し、さらにはその状況の打開策を模索して頻繁に用いていた概念なのである。

従来この「事実」をめぐる問題は、いわゆる「暗黒時代」としての植民地末期の状況を窺わせるものとして扱われてきた。「事実」を受け入れた知識人には当然、「知性の放棄」や「親日」といったレッテルが貼られ、「事実」の問題は、その拒否／受理、反日／親日、知性／反知性という二項対立的な構造の中で、より本質的な問いの可能性が閉ざされたまま消費されてきたのである。本論文は、その「より本質的な問い」の提起として、「事実」の限界が露呈される契機を「信念」という概念をもって捉えようとするものである。以下、植民地朝鮮における「事実」の問題を、本論文の分析対象との関連においてより具体的に提示することとする。

植民地期の朝鮮で出された「事実」をめぐる議論は、もともとヨーロッパにおいて発せられた「事実の世紀」を受け入れる過程で提出されたものである。20世紀を「事実の世紀」と規定したのはポール・ヴァレリーであるが、それは第1次世界大戦直後のヨーロッパの

1 本稿で引用する朝鮮語の文献は、筆者によって日本語に訳されたものである。引用した文献の著者名に関しては、漢字名が明記されている限り漢字名で表記し、漢字名が把握できなかった著者名はカタカナで表記した。また、以下の本文中における傍点、下線などの強調は、特に断りが無い限り筆者によるものである。

2 黄鎬徳「国語と朝鮮語の間、内鮮語の存在論——日帝末期における言語政治学、玄永燮と金史良の場合」『大東文化研究』58巻58号、2007年、143頁。

3 「一つの社会は獸性から秩序にまで向上する。野蠻期とは事実の時代であるがゆえに、秩序の時代とは、従って、虚構の制覇期であることは必定である。[……] 精神は、自らを事物からこれほど独立させ、原初的な必要からこれほど脱却させてくれた無限に錯綜する体系に頼着せず、敢えて思弁しようとする。自明の理が精神に根底を隠す。[……] このようにして、かずかずの理念の紆余曲折を経て、またそれらの運動の渦巻のうちに、無秩序と事実状態とが再現し再生して、秩序を乱さないではおかない。」(強調は原著者) ポール・ヴァレリー、新村猛訳『「ベルシヤ人の手紙」序』『ヴァレリー全集』第8巻、東京：筑摩書房、1967年、174-177頁(初出De Montesquieu, *Lettres persanes*, Préface de Paul Valéry, Terquem, 1926)。さらに、ヨーロッパが直面した危機に対するヴァレリーの詳細の分析はポール・ヴァレリー、桑原武夫訳『精神の危機』『ヴァレリー全集』第11巻、東京：筑摩書房、1967年、24-41頁(初出The Athenaeum, April 11 and May 2, 1919; The Living Age, May 10, 1919; La Nouvelle Revue Française, 1er août, 1919)を参照した。

4 ヴァレリーの「事実の世紀」が帝国本土で変容された様相については、車承棋「事実の世紀、偶然性、協力の倫理」『民族文学史研究』第38号、聖公会大学東アジア研究所、2008年。269-278頁を参照されたい。車承棋は、河上徹太郎の「事実の世紀」(初出不明、1938年)や座談会「廿世紀とは如何なる時代か」(『文学界』1939年1月)における「事実」をめぐる議論とヴァレリーの議論を比較分析し、当時の日本本土における「事実の世紀」が「東洋的知性」を肯定する論理に帰結したことを論証した。

5 車承棋は、「事実」の問題が台頭した植民地の思想的状況を「非決定性の世界」と規定し、

状況を批判するためであった。ヴァレリーのいう「事実の世紀」は、それ以前の「秩序の世紀」と対をなすものである。ヴァレリーによれば20世紀は、「事実」との闘争によって得られる「秩序」(虚構としてのヨーロッパの歴史、文化など)というものが自然化し、「秩序」の虚構性に対する認識が失われた時代、言い換えればフィクションとしての「秩序」が「事実」と化した時代である。ヴァレリーにとってこのような事態は、ヨーロッパにおける「精神の自由」が到達した臨界点を露呈させたのであり、さらにはヨーロッパの精神性を裏付けていた「普遍」への感覚が相対化される契機でもあった³。

ヨーロッパ的近代を批判するために用いられた「事実の世紀」という規定は、日本帝国の本土にて翻訳され、植民地朝鮮に輸入される⁴。しかし、ヨーロッパの危機という現状認識は共有されていたとはいえ、「事実」という概念に託された態度・実践は、ヴァレリーのそれとは根本的に異なるもの、より正確には正反対のものであった。例えば、朝鮮の知識人が直面した「事実」は、具体的な実践として徴兵制の擁護、国語(日本語)による創作、日本精神の肯定を招いた。ヴァレリーの「事実の世紀」が「事実」が終わるところ——ヨーロッパ的精神の行き着く限界が暴かれる——に位置付けられるなら、植民地における「事実の世紀」は、「事実」が開始されるところ——帝国日本の「秩序」が「事実」として強いられる——に位置付けられていたのである。

「事実」のレトリックは、現実の状況を揺るがし難いものとして表象する。そこには「発見されるべき」ものはあっても、「作り上げられるべき」ものは存在しない。言い換えれば、「事実」に符合する実践のみが許されるのであり、実践によって或る「事実」が作られるという可能性の領域は閉ざされる。黄鎬徳も指摘したように、とりわけ植民地が経験した「事実」は、日本の転向社会主義者たちがそうであったように、単なるイデオロギー的な切り替えによって対応できるものではなかった。「事実」の問題は、批判主体としての知識人に加えて、ナショナル・アイデンティティとしての朝鮮人の存亡に関わる問題であったことから、重層化し、より複雑な形の論理的操作(批判ではない)を生み出した⁵。

植民地末期の朝鮮において「事実」概念の論理的処理が、とりわけ知識人にとって切実な問題であったこと、それがいわゆる「親日」の契機として働いていたことは、以上に論じた通りである。本稿の問題関心は、「事実」を受け入れるか、「事実」に抵抗するかではなく——そもそも日本という「事実」を受け入れない選択肢は事実上存在しなかったが——、「事実」が「事実」として初めて成立するモメントそのものにある。というのは、もし「国民」を創り上げる論理に対する根本的な批判が可能なら、それは「国民」の外部には

なく、まさに「国民」が成立するその瞬間においてこそ可能だと考えるからだ。

「国民」になること＝「事実」を受け入れることを「決断」した朝鮮の知識人の中に崔載瑞^{チャ・ジェソ}（石田耕造）という人物がいる。京城帝国大学英文科および同大学院を卒業した、朝鮮の評論家・英文学者である。1930年代、ヒューム（T. E. Hulme）、リード（H. Read）、リチャーズ（I. A. Richards）、エリオット（T. S. Eliot）など、イギリスにおける文学論を積極的に受け入れ、ロマン主義に対抗する「主知主義文学論」を打ち立てることで、1930年代の朝鮮文学に新たな可能性を切り開こうとした人物である。植民地当局による「文壇統合」⁶の後、植民地末期の唯一の文芸雑誌として『国民文学』（1941～1945）が創刊されたとき、崔載瑞はその『国民文学』の主幹を務め、「新体制」の文学による論理化を主導した。それ以前には文芸誌『人文評論』（1939～1941）の編集と発行に携わり、「進歩的な文学論」を展開しながら「文学と現実の望ましい関係と韓国文学の当面する課題に関する解決法案を模索」していた⁷彼が、『国民文学』を通じて日本に「転向」してしまったことは、「知性と論理の破綻」を象徴する出来事として理解されてきた⁸。

確かに『国民文学』創刊以降の彼は、既存の立場の多くの部分を修正し、国家（日本）主義を全面的に掲げたのであり、それが従来の「知性と論理」に反するようにみえることは否定できない。しかし、前述したように、崔載瑞の「転向」がイデオロギー的な選択の結果ではなく、「事実」に関わるものであったのなら、目の前に存在する「事実」を認識し、受け入れるということは、むしろ「知性と論理」によって可能なのではないだろうか。さらに問いを深化させて次のように言うことができる。植民地において国民化のプロセスが表面上「事実」を「知る」ことに他ならなかったならば、「国民」になることを批判的に思考することは、従来の「知性と論理の破綻」する、まさにその場面においてこそ可能ではないか。

本稿は、知性と論理対反知性と非論理の図式の中で分析されてきた植民地の知識人、崔載瑞のテキスト、とりわけ1943年に刊行された『転換期の朝鮮文学』を、「信念」というキーワードのもとで分析することで、以上のような問いに答えることを目指す。帝国日本による支配が暴力として強いられたのみならず、知識としても消費されていた植民地において、知識の外部が切り開かれる場面——さらには再び閉ざされる場面——を捉える本論の立場は、体制協力の内的正当性を明らかにし、いわゆる「協力知識人」を免罪することとは程遠い。むしろそれは、「知（る）」の形で与えられる、かつ主体による真の「決定」を許さないあらゆる理念への批判拠点を用意することを意味する。国家が「事実」として提示される瞬間——国

「事実」をめぐる行われた多様な知的実践が単なる帝国への「協力」を合理化するためのものではなく、「主体／世界の関係を再設定」しようとする試みであり、「近代的な生政治の構造」——生き残るためには、国家という「事実」を受け入れなければならない——に関わるものであるとした（車承祺、前掲、297-302頁）。むしろ、植民地における「事実」の問題を取り上げたのは車承祺がはじめてではない。金允植は、すでに1973年の時点で、植民地期の「事実」の問題を当時の時代的な文脈の中で繊細に扱う必要があると指摘した（金允植『韓国近代文芸批評史研究』ソウル：一志社、1973年、396-401頁）。

6 実質、朝鮮語による新聞・雑誌の全面的廃刊を意味する。全国紙の東亜日報、朝鮮日報の廃刊（1940）、朝鮮語による有力文芸誌『文章』『人文評論』の廃刊（1941）の後に創刊されたのが『国民文学』である。

7 権寧珉編、田尻浩幸訳『韓国近現代文学事典』東京：明石書店、2012年、178頁。

8 崔載瑞に対する本格的な研究は、金興圭「崔載瑞研究—1934~1941年間の文学批評活動に対する文学的・批評史的研究」（ソウル大学修士論文、1972年）からはじまり、すでに多くの先行研究が提出されているが、植民地末期の崔載瑞が「主体性を失い」、「知性と論理の破綻」をみせ、破局を迎えたという認識は共有されてきた。近年、その「破綻」の多様な側面に注目する研究も提出されている。（イ・サンオク「崔載瑞の『秩序の文学』と親日ファシズム」『ウリマル研究』ソウル：ウリマルダグル学会、2010年；パク・ノヒョン「内鮮人と国民文学：新民族による新文学考案の企画——崔載瑞の民族文学と国民文学概念を中心に」『東岳語文学』第42集、ソウル：東岳語文学会、2004年；イ・ヘジン「新体制期、

崔載瑞の『国民文学論』『韓国学』第33号、韓国学中央研究院、2010年；ジョン・ソルヨン「植民地末期、国民文学論における国民化の論理とその文学的意味——崔載瑞のまつろふ文学を中心に」『사이間SAI』第9号、ソウル：国際韓国文学文化学会、2010年）。しかし、新しいアプローチをとるこれらの研究も、「知性」が破綻した後にも微弱ながら残っていた「知性」の要素を捉えようとした点で、「知性」／「知性の破綻」の図式を踏襲していたと言える。問うべきなのは、「破綻」がむしろ「知性」による出来事ではないかということ、したがって従来の図式では「知性」そのものを問いに付すことができないのではないかということである。

9 崔載瑞「事実の世紀と知識人」『朝鮮日報』1938年7月2日。

10 崔載瑞「文学精神の転換」『転換期の朝鮮文学』京城：人文社、1943年、16-20頁（初出『人文評論』1941年4月号）。『転換期の朝鮮文学』は日本語で書かれた文献だが、以下に引用する部分では仮名遣いは原文のまま、旧漢字は新字に改めた。

家が開始される瞬間——を目撃できる植民地は、その批判拠点の用意を可能にする場として、現在においても意味をもつのである。

1. 「事実」＝「国家」の同語反復的構造

前述した通り、植民地において「事実」を受け入れることが国家（帝国日本）に包摂されることを意味していたのなら、「事実」と「国家」を結びつける論理は、具体的にいかなるものであったのだろうか。まず、ヴァレリーの「事実の世紀」を援用する崔載瑞の文章を糸口として、崔載瑞における「事実」と国家の関係にアプローチしてみる。

事実が秩序を破って前進し、行動が知性をはねつけて進むところに現世紀の隠せない風貌が現れる。むろん、スケプティシズムによれば、欲望の合理化でない思想はないし、行動の弁護でない哲学もないが、現世紀においては思索が未だ事実を合理化できる隙がなく、また行動がわざわざ思想の弁護をしないことに、その峻烈な時代性がうかがえる。〔……〕今日の事実の世紀は、人智が過去の五世紀の間、物質的にもほぼ完璧に近く構成しておいた秩序の窘塞（ママ）を破ることから始まった。知性では解決できない矛盾と弊害を知性の苦悶と懐疑に任せ、各々の独自の力で自己の身の運命を開拓しようと固く決意したのが、現世紀である。⁹

崔載瑞にとって「事実の世紀」は要するに、「思索」と「思想」が目の前にある「事実」や「行動」の裏付けとしての機能を失った世紀である。それは「知性」によって支えられていた前世紀の「秩序」が「知性」から遊離して存在する事態、「知性」が「事実」に対し何ら影響力も持たない状況を意味する。この事態を文学において言い換えればこうなる。すなわち、「意識の層」＝「知性」としての文学は「存在の層」＝「事実」を正確に反映すべきだが、現代文学は現時代の「存在の層」を正確に反映しておらず、だからこそ「個性の分裂、知性の無力化、頹敗の気分の瀰満、反抗的諷刺の一般的嗜好、暗黒色の優勢、主題の貧困、モラルの喪失、性格の溶解、描写精神の弛緩、批評精神の喪失、其他一々数へ切れない多くの非規律性」といった弊害が文学の中に現れる、と¹⁰。このような「意識の層」と「存在の層」の遊離は、崔載瑞のみならず、いわゆる反映論に基づくリアリズムをその美学的方法としていたプロレタリア文学においても提起されたもので、例えば植民地朝鮮の代表的な左派文学者、林和はそれを「語ろうとすること」と「描こうとすること」の分裂と規定し

た。林和が分裂の原因を真に描くべきことを描かない「トリビアリズム (trivialism)」に求め、「トリビアリズム」の排除による分裂の解決——「語ろうとすること」と「描こうとすること」の弁証法的止揚、総合——を目指していた¹¹のに対し、崔載瑞はすべての分裂の原因を西欧的価値としての個人主義に求めた。

個人主義的な営利追求が宗教的・道徳的制約乃至は国家的統制の手を離れて無制限に追求される時、そこに企業家同士の自由競争、国民間の自由競争、自由貿易及び無制限なる生産増加を見るやうになり、又斯くの如き機構を高度に運用するため有利なる企業に対しては多数の匿名投資家が参加し、そこに資本家の純投機的なる活動が開始されることは我々の経験する所である。資本が斯くの如く自由に流動する時、それは国家自体の破滅を招くかも知れない所の経済的恐慌を常に内部に蔵してゐるのである。合理主義の嫡子として発達した所の資本主義が合理主義的經理を以てしては遂に統制し得ないまでに強大化した所に、外ならぬ現代の危機があるのである。

経済の自律化が以上の如く遂に国民経済を解消するの地点にまで至らずんば止まずとすれば、文化の自律化は国民的羈絆を脱して国際的な横断的結合を成し遂げずんば止まぬであらう。若し学問がたゞ学問のために追求されるならば、それは国民的生活と連結するよりは抽象的な国際性と連結し易くなる。と同じく若し芸術がたゞ芸術のために追求されるならば、それは国境を越えて抽象的な人間性と連結し易くなる。¹²

崔載瑞の「事実」認識の出発点に世界恐慌 (1929) があること、世界恐慌の原因として個人主義からなる合理主義、資本主義が挙げられていることは、植民地において「転換期」「転形期」という現状認識¹³のもとで共有されていた近代に対する危機意識を表しているが、それは当時の日本本土における思想の「転換」に共鳴したものである¹⁴。個人主義が問題となるのは、それが「抽象的な人間性」を生み、また「抽象的な人間性」同士の国境を超えた繋がり (コスモポリタニズム) を促すためである。個人主義に含まれる抽象性が、「思索」「思想」「知性」「意識」の抽象化を招き、具体的な「事実」、すなわち「国民的生活」「国民的羈絆」とそれらの間の乖離を生み出していると、崔載瑞は捉えているのである。

そこで彼は「知識人は知性を放棄する他には道がないのか」——「事実」を前にして何をすべきか——という問いを提起し、その答えとして「具体的な事実」を受け入れることを唱える。なぜなら「事実」は、「それに服従しなければ、それに復讐される」からだ。崔載瑞にとっ

11 林和「世態小説論」林和文学芸術全集編纂委員会編『林和文学芸術全集3——文学の論理』ソウル：ソミョン出版、2009年、275頁（初出『東亜日報』1938年4月1日～6日）。

12 崔載瑞「転換期の文化理論」前掲、7-8頁（初出『人文評論』1941年2月号）。

13 1935年の朝鮮の文壇では「世界的危機」という言葉が散見され、ヨーロッパが担っていた近代文化に代わる新たな文化の模索が訴えられていた。そのきっかけには「プロ文学」の退潮 (1935年の朝鮮プロレタリア文学者同盟の解散) が招いた国内における「精神的構造一般の空白地帯」 (金允植『韓国近代文芸批評史研究』202頁) とナチスの台頭、日中戦争に象徴される国際情勢の緊迫した状況があった。「普遍」への感覚を規定していたヨーロッパ的な価値体系 (自由主義、個人主義) とファシズムの正面对決を目の当たりにした当時の知識人たちは、1930年代末の状況を「我々の日常生活を指導していたあらゆる常識と道徳伝統と慣習が崩壊する代わりに新しいもの、異常なものを創造するためのあらゆる情熱が迫ってくる時期」すなわち「転換期」=「転形期」と認識していた。車承祺・鄭鐘賢編『徐寅植全集1——歴史と文化』ソウル：ヨンラク、2006年、148-164頁（初出「現代の課題 (2) ——転形期文化の諸相」『朝鮮日報』1939年4月）。

14 満州事変～日中戦争勃発の時期に日本本土にて左右を問わず行われた思想的「転換」——西欧的近代の価値転換——については、廣松渉『近代の超克』論——昭和思想史への一視覚』東京：講談社、1989年、102-155頁を参照した。

15 崔載瑞「事実の世紀と知識人」。

16 崔載瑞「文学者と世界観の問題」前掲、112頁（初出『国民文学』1942年10月号）。

17 崔載瑞「国民文学の要件」同上、57頁（初出『国民文学』1941年11月号）。

18 崔載瑞「文学精神の転換」同上、20-21頁。

て「事実」は、人間が作り上げた「歴史的秩序からはみでた」ものでありながら、「虚空に投げた石」が「必ず地面に落ちる」ような、まるで自然法則のような不可抗力である。したがって「事実」を受け入れないことはただの自己欺瞞にすぎず、知識人は「事実」を受け入れ、それをすでにその臨界が露わになってしまった「秩序」と関連づけることによって、かろうじて「知性」を保つことができるというのだ¹⁵。

崔載瑞において「具体的な事実」は要するに「生活全一体としての民族と国家」を意味する。（個人主義の抽象性と対立をなす）国家の具体性は「民族と国土の間の直接的な連関」、すなわち「国民の独特な本質、空間的規定、歴史的運命」に支えられる。国民はその国家との交換不可能な関係——国家は「国民にとつては唯一絶対であり、それを一国民から他の国民に移すことが出来ないから」¹⁶——によって価値を付与され、国民と国家は「価値を付与するものと価値を生かすものの関係」として結ばれた一個の有機体を成すようになる。知識人、とりわけ作家は、そのような「事実」を「徹底して自覚」し、「意識しないまでに意識化」することで、様々な矛盾と弊害から脱することができる¹⁷、という論理構造である。しかし、国民と国家の関係に対するこのような認識は、個人主義がもたらした弊害に対する具体的な方法にはならない。そもそも彼のいう「意識化」のきっかけが提示されない限りそうである。そこで崔載瑞は、国家が具体性として自覚・意識されるきっかけとして戦争を提示する。

戦争は従来の緩慢なる、或は無自覚なる転換にアクセントを付け、テムポを上げ、あらゆる点を明確ならしめ意識化せしめるの役割を僅か二三年の間にやり遂げてしまった。のみならず戦争は（ジムメルの云ひ方を真似るならば）文化の一時的なる個々の現象の中から多くのものを決定的に排除し、更に多くのものを決定的に新しく創り出すであらう。斯くして戦争は一定の期限後には決定的に新しい生活条件を創り出すであらうことが厳然たる事実として我々の前に横たはつてゐるのである。¹⁸

国家がまさに「不可抗力」な「事実」として、あらゆる矛盾を解決できる契機として提示されるのは「戦争」によってである。抽象化した人間が世界との分裂に苦しむ「事実の世紀」において、国家は分裂を解消できる具体性として存在し、その国家は戦争によって「事実」として経験される。先立つ戦争が押しつけた国家＝「事実」は、戦争によって正当化される。つまり国家＝「事実」を受け入れなければいけない理由は国家が「事実」として存在するからであるという同語反復的な構造が、戦争において完成されるのである。この転

倒された前後関係は、シュミットに言わせれば全く正しいものである。「戦争は決して、政治の目標・目的ではなく、ましてやその内容で」もなく、「現実可能性としてつねに存在する前提」として、「人間の行動・思考を独特な仕方で規定し、そのことを通じて、とくに政治的な態度を生み出す」からである¹⁹。

以上のような論理構造は、崔載瑞のみならず、「事実」を論理化しようとした植民地の知識人たちが、1930年代後半に経験しなければならなかった思想的状況でもある。そして、崔載瑞自身、近代が生み出した様々な「乖離」が、朝鮮民族（フィクション）と日本国民（事実）の間に置かれた植民地人の特殊な状況に起因することについては明確に示さないものの、国家＝「事実」の論理構造のうちにナショナル・アイデンティティをいかに処理するかという問題に関わる動機があることは確かである。崔載瑞が戦争について論じるときに意識しているのは間違いなく日中戦争であり、日中戦争によって国家を経験し、「事実」を自覚すべき主体は朝鮮人であるからだ。

この貧しい評論集は、私個人の側から云ふならば、私自身が文芸の世界に於て日本国家の姿を発見するに至るまでの魂の記録だと云へる。私は子供の時から日本のことばと、部屋と、その礼儀正しさを、飽くまで涸渾たる学問的好奇心と特に明治文学とが好きであった。そして私が知り合った幾人かの内地人とは、何らの隔りもなく付き合ふことが出来た。かうして私は日本を呼吸し、日本の中に育つて来た。然しそれらのことを一々意識的に日本国家と結び付けて考へるやうなことはしなかった。要するにそれは趣味の問題であり、教養の問題だったからである。

かうして永年身につけて来たものを、改めて自己から突き放し、意識的に日本と結び付けて考へると云ふことは、私に取つてはショックであり、時には面映いことでさへあつた。然し間もなく、それは我が同胞が踏み越えねばならない茨の道であることを知つた。その日以来、私は黙々と私自身の道ではなく、我が同胞の道を踏んだ。それは要するに一億国民の道だ。²⁰

「自己から突き放し」、「意識的に考へる」ことは、まさに「事実」＝「国家」＝「日本」を受け入れる崔載瑞の方法論である。すでに目の前に到来した所与の「事実」を一度対象化・発見しては再び受理するこの反復的な構造は、それが「茨の道」だと言われているものの、戦争によって経験される国家の現前そのものが国家の正当性につながる——「事実」は「事実」であるがために正当であり、受け入れるべきである——論理構造とさほど変わらないものである。それは「知る」という、「事実」から逃れることのできない実践によって裏付け

19 カール・シュミット、田中浩・原田武雄訳『政治的なものの概念』東京：未来舎、1970年、27頁（初出Carl Schmitt, *Der Begriff des Politischen*, Duncker & Humblot, 1932）。

20 崔載瑞「まえがき」前掲、4-6頁。

られているからだ。

2. 「事実」に対する「信念」の位相(1) ——「事実」=「国家」=「日本」を基礎づける

しかし、上述したような「事実」=「国家」を成り立たせる同語反復的な構造からはみでる要素が、崔載瑞のロジックの中に組み込まれていることは注目に値する。それは「信念」という言葉に集約される、「事実」を「知る」ことに先行するモーメント——「知性と論理が破綻する」モーメント——においてである。以下の引用は、崔載瑞が「国民文学」が成り立つための条件と国民文学の進むべき道を提示した文章、「国民文学の要件」(1941)の一部である。

新しい原理は発見さるべきものでなくして、体得せらるべきものであつたことが、今となつては瞭りして来た。つまり新しい批評原理を発見しようとして抽象的理念の中に探索を試みた凡ての努力が無に帰し、今や指導原理は国民的立場に於いてのみ体得されると云ふことが判明したからである。この簡単な真理が何故に今日まで到達されなかつたか？それは結局研究と認識の問題ではなくして、態度と信念の問題だつたからである。国民的立場を率直に受容れ国民意識をしつかりと把握するのは今日研究や認識よりも信念と勇気を要する。これが当り前な事柄の中に含まれた容易ならざる点であつたと思はれる。〔……〕然るに先程からも繰返してある通り、個人主義的立場からではかゝる原理はもはや絶対に与へられなくなつた。如何に感受能力を練磨し文学的修練を積んでももはや打開の余地は無い。それは根本的な態度と信念の問題だからである。²¹

「国民意識をしつかりと把握する」ことは、認識する、すなわち「知る」ことによってではなく、「信念と勇氣」によって可能になる、言い換えれば「事実」=「国家」は「信念と勇氣」によって「体得」できる、という。国家という「事実」を知り、意識すべきだという叙述とは矛盾せざるをえない内容の文章である。崔載瑞における「信念」は、単に国家と個人の無媒介的な関係を裏付けるためにこの時期に突然登場したのではない。一見無根拠な精神論に見える崔載瑞の「信念」は、実は『国民文学』以前の彼の議論の中にすでに提出されていた。そして逆説的なことに『国民文学』以前の崔載瑞における「信念」は、普遍的な価値としての「ドグマ」を「個人」において基礎付ける原理に他ならなかった。

崔載瑞は、1938年に発表した「批評とモラルの問題」という文章の中で「個人主義的作家の間に根深く広まっていたデカダンの精神と、それと並行し批評家の精神を侵食してきたスケップティシズム」を克服するために、価値判断の根拠としての「ドグマ」を「断定」し、その「ドグマ」を通じて各々の個人の価値意識に統一された秩序を与えることを促していた²²。ただ、その「ドグマ」は、国家のように外部から与えられるものではなく、あくまでも「個性」によって把握可能で、さらには「個性」によってのみ選択されるべきものとして提示されていた。「ドグマ」を「個性」によって根拠づける、これが1930年代後半までの崔載瑞の「モラル論」の骨子であった。

政治がモラルの支軸になることは事実だが、政治が個人の選択と責任にまで還元されるときにはじめてモラルの問題が生じる。政治が集団主義と服従主義を基礎として成立するなら、その機構を合理化した政治学説のどこからモラルの端緒を得れば良いか、我々にはわからない。我々は個性を通じてのみモラルを把握することができ、また個性の中で政治を考えることは、作家が当然成すべきことである。²³

いくら生活の目的と行動をもっているといえ、それが彼自身の意志と選択から成っていなければモラルをもっているとは言えない。モラルの実質とは、価値が外部にあるとしても、それを具現する能因者は個性の内部にあるということであるからだ。²⁴

しかし、「ドグマ」の把握と選択はいかにして可能なのか。「信念」が重要な概念として登場するのはここにおいてである。崔載瑞にとって「信念」は、現代における「ドグマ」(普遍的原理)の不在に対する最終的な対処方法として、新しい「ドグマ」を樹立し、それを「個性」と仲介する方法論的概念としての位相を占める。彼は言う。「予言とは、近い将来に必ず実現されてはじめて肯定されるものではなからう。イスラエルの預言者たちが絶叫しても、神の王国は未だ地上に実現されていない。しかし、我々はそれが実現されればいかに良いかを知り、またそれに向けての努力に人生最高の価値があることを固く信じている。[……]作家は信念なしでは創作することができない」²⁵。「信念」は、「イスラエルの予言」のように、未だ実現されていないものに向けられるが、「信じる」まさにその行為によって価値あるもの、すなわち「ドグマ」が遂行的に到来させられるというのだ。

崔載瑞は、現代に対する問題意識から始まり、普遍的基準(「ドグマ」)がいかなる実践によって導き出されるかという問題にまで

22 崔載瑞「批評とモラルの問題」金活編『崔載瑞評論集』螢雪出版社、1981年、22-38頁(初出『改造』1938年8月号)。

23 崔載瑞「作家とモラルの問題」『文学と知性』京城：人文社、1938年、265頁(初出『三千里文学』1938年1月号)。

24 崔載瑞「批評とモラルの問題」前掲、38頁。

25 崔載瑞「風刺文学論——文壇危機の打開策として」前掲、120-123頁(初出『朝鮮日報』1935年7月14日～29日)。

26 崔載瑞「国民文学の立場」『転換期の朝鮮文学』123頁。

27 「いま不可避なる戦争危機をかく認識し之を国内改革との結合において進歩的なものに転化せしめるこそ、我が労働階級の採るべき唯一の道と信ずる」『共同被告同志に告ぐる書』『改造』1933年7月号。

28 「内鮮一体の具体的実現過程としては、内鮮一体の字義も既知の事実であり、その内容も既知の事実としてもはやそれが具体的に実現されているので……。イエスは『叩けよ、さらば開かれん』と言ったが、門を叩くのは罪でなく、また門を叩かなければ開かないのはイエスを俟たなくてもわかることである」(金明植「内鮮一体の具体的実現過程」『鉄業朝鮮』1940年1月)：「内地人と朝鮮人が同根同祖の血縁的連関を持っているということは……小学校児童でも皆知っていることである」(印貞植「内鮮一体の文化的理念」『人文評論』1940年1月号)：「半島人は完全な日本民族になることができ、また全世界の民族が一族一国家を形成することもできると信じる」(玄永燮「内鮮一体」と朝鮮人の個性問題」『三千里』1940年3月号)：「国籍の上では、朝鮮人はすでに三十年前から日本帝国の臣民としての地位を占めているのである。……東亜の現実から見て、世界の動向から見て、内鮮のすでに離れられない経済的結合の堅固性から見て、朝鮮人の将来はただひたすらに旧来の民族性を止揚し、徹底して皇民化することでのみ、広闊なる前途を展望することができる」(印貞植「内鮮一体」と言語」『三千里』1940年3月号)。これらの引用は「植民地／近代の超克」研究会編「資料と証言Ⅱ日中戦争期・朝鮮知識人の内鮮一体論」『Quadrante:クワドランテ：四分儀——地域・文化・位置のための総合雑誌』第7号、東京外国語大学海外事情研究所、2005年にて翻訳されたものに拠る。

思考を拡張させていったと思われる。「信じる」べき価値というのは、個人の意志と無関係なところから与えられるものではなく、「信じられる」ことによって初めて得られる、という価値意識全般に対する批判的視座からは、いわばポスト構造主義的な国家・宗教批判の萌芽さえもみてとることができる。さらにいうならば、彼の議論の中で「批評」は、「ドグマ」と「個性」を仲介する位置に置かれることから、崔載瑞の「モラル論」は「批評」の存在意義を「信念」によって論理化しようとした企てでもあったとも言える。

『国民文学』以前の崔載瑞の議論における「信念」は、あくまでも「ドグマ」の不在を前提とするものであった。未だいかなる価値なのか確定されていない、しかしその「良さ」が「信じる」ことによって始めて「予言」されるものが「ドグマ」なのである。そしてまさに根拠のないところで開始されるというのは、「信念」の本質を成す。1940年代に入って崔載瑞は「事実」＝「国家」＝「日本」を「ドグマ」の位置に置く。それらの価値は「ドグマ」とは異なり、「不可置換性」、「不可反復性」をもつ「本質的な価値」²⁶そのもの、言い換えればすでに価値の良さが所与のものとして与えられているもの、根拠づけの実践を要しない絶対的なものである。つまり『国民文学』創刊後の崔載瑞は、「信じる」べきものがすでに確定され、さらには強制されていたという意味において、根本的には「信念」が不可能なところで「信念」を開始させていた。

この不可能な「信念」が植民地のみならず、日本本土における「転向」——マルクス主義からの「転向」、朝鮮民族からの「転向」——のロジックの中でも重要な装置として登場するということは、崔載瑞の「信念」を単に親日的な体制協力のみ片付けるとの困難さを物語っている。佐野・鍋山の転向声明(1933)における「信ずる」²⁷ということばや植民地の内鮮一体論者の議論における「事実」と「信念」の交錯²⁸においても、崔載瑞のそれと同じく、根本的には不可能な「信念」が、まるで「転向」の根拠として説得力があるかのように発せられている。

日本本土と植民地朝鮮で散見されるこれらの「信念」を捉える際に、それが合理的な「事実」、あえて言い換えるなら日本という「国際法上の事実」²⁹に決して反するものでないと同時に、「事実」そのものへの無批判的な「信念」でもないことを理解することは重要である³⁰。「法」の脱構築可能性を考察した『法の力』においてデリダは、モンテーニュの「権威の神秘的基礎(fondement mystique de l'autorité)」を援用しながら「人が掟に従うのは、それが正義にかなうからではなくて、権威をもつからである。『信奉(crédit)』という語は、命題にかかる負担をすべて背負っており、権威の『神秘的』性格へのさりげない言及を正当なものにする。掟の権威は、人が捉

を信奉するという一点にかかっている。人が掟を信奉すること、これこそが掟の唯一の基礎である。この信仰の行いは、存在論的または合理的な基礎ではない³¹と論じた。「掟」、すなわち「法」を定礎し、その唯一の基礎となる「信仰」は、先行する「法」が存在しないがために「既存のいかなる正統性をもってしても自己を権威づけることができず」、「合法的とも非合法的とも言えない」ものである³²。デリダの分析する「権威の神秘的基礎」は、崔載瑞の文章にみられる、1930年代の「信念」に比べれば多少唐突で奇妙な「信念」の語を理解する際に有意味な示唆を与えてくれる。やや長くなるが、崔載瑞における「信念」の「神秘性」をよく表している文章であるため、以下に引用する。

しかしそれにしても、やはり理念的たるを免れなかったはずだ。と言うのは、国体論の筋金——日本人ならば何らの理論的操作も経ずして体験し得る所の物——が欠けていたと思われるから。だから記紀万葉が引用され、真淵、宣長が祖述され、あるいは神国論や八紘一字や内鮮一体が主張されたとしても要するにそれは文学論の展開として、理論的にそこまで行ったと言うだけで、その底に、血流的な信念と情熱が伴ったとは言えまい。言うまでもなく、この場合にも少数の例外はある。しかし大多数の朝鮮文人はその主張と信念との間に挟まれたる隔り（あえて乖離とは云はぬ）をば、俄かにはどうすることも出来ず、それを埋め合はせる速度と時局進展の速度とが喰い違つて、それに若干の煩悶もあつた訳だ。私は敢へて煩悶と云ふ。何故ならば、それは我々の向かはねばならぬ目標の知性的理解と、云はゞ我々が現在あるところの感性的習慣との不一致乃至間隙を意味するものであつたから。〔……〕日本人とは何か？日本人となるためにはどうすればよいのか？日本人たるためには、朝鮮人たることをどう処理すればよいのか？〔……〕こゝで私自身の体験を述べよう。私は去年の暮れ頃からいろ／＼と自己を処理すべく深く決意し、元旦にはその手始めとして、創氏をした。そして二日の朝、そのことを奉告のために、朝鮮神宮へお参りした。大前に深々と首を垂れる瞬間、私は清々しい大気の中に吸ひ上げられ、総ての疑問から解き放たれたやうな気がした。——日本人とは、天皇に仕え奉る国民である。³³

日本人とは何か、日本人となるためにはどうすればよいのか、日本人になるためには朝鮮人であることをどう処理すればよいかと問い続けていた崔載瑞は「深く決意」し、朝鮮神宮に参拝する。日本人とは何かという問いに対する答えは、彼が「決意」し、神宮に参

29 黄鎬徳、前掲論文、143頁。

30 したがって崔載瑞の「信念」は「知性と論理」と「信念と態度」に置き換えたこと（金允植、前掲、416頁）を意味するものでもなければ、「理解できない」ことに対する問いの封鎖（孔任順「自己のサバルタン化とコスモポリタンという理念——『転向』と金南天の小説』『尚虚学報』第14集、尚虚学会、2005年、78頁）でもない。

31 ジャック・デリダ、堅田研一訳『法の力』東京：法政大学出版局、1999年、27-28頁（Jacques Derrida, Force de loi, Galilée, 1994）。

32 ジャック・デリダ、前掲書、14頁。

33 崔載瑞「まつろふ文学」『国民文学』1944年4月号。

34 「編集を了へて」『国民文学』
1942年5・6合併号。

35 創刊当時『国民文学』は、
国語（日本語）版を年に4回、諺文
（ハングル）版を年8回の刊行す
る予定だったが、1942年5・6月
合併号からは諺文を全面的に廃
止し、国語雑誌となる。実質的な
諺文版は、1942年2月号と3月
号のみとなった。

36 ウィリアム・ブレイクの
詩集、『無垢の歌（Songs of
Innocence）』（1789年）に収録さ
れた「古の吟遊詩人の声（The
Voice of the Ancient Bard）」の
ことである。「巻頭言——太陽を
仰げ」『国民文学』1942年5・6月
合併号。

37 ただ、デリダにおける「信」と
崔載瑞における「信念」をどこ
まで重ねて論じることができるか
という問題は依然として残る。こ
こで言えることは、デリダの「信」
も崔載瑞の「信念」も世俗的な「信
（conviction）」と宗教的な「信
（belief）」などに簡単に分ける
ことのできない概念であるという
ことだ。デリダの議論の中で「権
威の神秘的基礎」の位相を占める
「信（仰）」は、あらゆる「法」の
基礎づけに関わるという点で必ず
しも「宗教的」ではない。高橋哲
哉の言葉を借りれば、「実定的で
あろうと」「自然的」であろうと、
成文法であろうと慣習法であろうと、
「欽定」法であろうと「民主的」
法であろうと、すべての法は歴史
的に制定され「構築」されたかぎ
りにおいて、逆に脱構築すること
が可能である。そして「信」はあ
らゆる「法」を基礎づける、「知に
還元不可能な」経験なのである。
崔載瑞における「信念」が、彼に
とって「知」として認識できる領域
を超えたところにある問題、すな
わち朝鮮人から日本人になり、「国
家」を受け入れるという、まさにナ
ショナル・アイデンティティの基礎
づけとして働いているという点に
おいて、デリダの議論は有意義
な参照点となる。ただ、デリダに

拝した瞬間にまるで「啓示」のように与えられる。崔載瑞はこう言
わんばかりである。「信じよ、さらば与えられん」。何の因果性もな
く突然与えられるこの「啓示」は一瞬にして彼を「国民」たらしめる。
このような「啓示」の瞬間は他の文章からもみられる。

用語の問題が解決されて、本誌としては最大の問題が解決さ
れたのである。朝鮮語は、最近朝鮮の文化人に取っては文化の
遺産と云ふよりかは、寧ろ苦悶の種であつた。この苦悶の種を
破らぬ限り、我々の文化的想像力は精神の囚人になるばかりで
ある。かうして苦悶を抱いて寝られね×夜のこと、ふと思出し
て読み直して見たのはブレイクの詩であつた。翌日の朝、私は
国語雑誌への措置を決意したのである。³⁴（×の一字は判別不可）

これは『国民文学』が全面的に国語（日本語）版³⁵になった際に書
かれた編集後記である。ここでもまた崔載瑞は、突然「清々しい大
気の中に吸ひ上げられ」て「国民」になったときと同じく、「ふと思
出して読み直して見た」ブレイクの詩³⁶によって「国語」へと決断す
る。ここでみられる「国民」「国語」への決断に先行する「信念」は、
確かに「神秘性」を帯びている。もしデリダのいう「掟」、「法」を「事
実」＝「国家」＝「日本」に言い換えることができるなら、次のよう
に言えるかもしれない。「事実」＝「国家」＝「日本」は、「信念」によ
ってその権威が与えられ、可能になる³⁷。しかし、繰り返すようにそ
もそもここで行われている「信念」による決断は、真の決断とは言
えない。「事実」＝「国家」＝「日本」はすでに与えられており、した
がってその「信念」は根源にあるというよりかは、「事」後的なもの
として、国家の合理性に回収されるから——すでに宗主国として存
在する国家を承認・正当化するから——である。しかし事後的とはい
え、崔載瑞の「信念」から、植民地において露呈された「事実」＝
「国家」＝「日本」の作為性や無根拠性を見出すことは十分可能である。
また、「信念」の事後的な開始は、そもそも「決断」が許されなかつ
た植民地の主体が仮想の「決断」を行い、自らを再び主体として位
置づける企てとしての側面もある。ただ、ここで強調したいのは、
「事実」＝「国家」＝「日本」の根源的な作為性や植民地における「国民」
になることの困難さ、ましてや崔載瑞が植民地末期にすら持ち得た
最低限の倫理性でもなく、より根本的な意味において「信念」が位
置する領域である。

崔載瑞の文章に見出せる「信念」は、植民地人を日本人へ、朝鮮
語を日本語へと転換させる契機でありながら、同時に「日本」の合
理的な統治システムからは決して捉えることのできないもの＝「神
秘的」なものとしてありつづける。「事実」を可能にしながらもその

「事実」から逃れる領域に置かれるもの、さらに言うならば、「神秘性」によって「事実」への切り込みを可能にすると同時に、常に「事後」的——植民地人は「事実」上帝国日本の二等臣民であり、それは「信念」の問題ではなく、すでに与えられた「事実」の受理に関わる問題である——でしかありえないもの、これが「信念」の位相なのだ。「信念」が占めるこのような位相こそ、様々な言語的实践で語られた当時の「信念」を非理性的な親日行為、あるいは知識人の自暴自棄として簡単に片付けられない所以である。合理性と非合理性、知性と反知性、親日と反日といった図式に収まらない、「法」＝「国家」＝「事実」に対するより本質的な問題提起が、そこに秘められているのである。

次節では、このような「信念」の位相を、崔載瑞の議論における「朝鮮文学」の位置付け方においてさらに検討してみる。

における「信」が宗教論の一環として提示されているという点、崔載瑞における「信念」が国家神道とも深く結びついているという点で、いずれも「宗教的」ではないとも言えきれないだろう。高橋哲哉『デリダ——脱構築と正義』講談社、2015年、200頁；関根小織『デリダ法哲学と宗教論における約束と信』『宗教哲学研究』22、京都宗教哲学学会、2005年。

38 ジャック・デリダ、前掲書、119-120頁。

3. 「事実」に対する「信念」の位相（2）

—遅延装置としての朝鮮文学

再びデリダの議論に戻ると、デリダはベンヤミンの「暴力批判論」における「法措定暴力」と「法維持暴力」の区分をいわば脱構築しながらこう論じる。

法／権利を脅かすものはすでに法／権利に属している。すなわちそれは、法／権利の根源に属している。[……] 基礎付けるとは、約束 (promesse) である。あらゆる定位作用 (Setzung) は、引き寄せておき (permet)、かつ前に置く (pro-met)。あらゆる定位作用は、置きかつ約束することによって、定位をなす。そして、たとえある約束が実際には守られなくても、反復可能性 (itérabilité) によって、番をする約束が、基礎づけという最も突出的な瞬間のなかに書き込まれる。このように、反復可能性によって、繰り返し (répétition) の可能性が、根源的なものの核心部に書き込まれる。³⁸

「合法的とも非合法的とも言えない」、「いかなる正統性」ももたない「法／権利」の根源、「権威の神秘的基礎」としての「信(仰)」は、それが定礎する「法／権利」の中に「約束」の形で書き込まれる。先の議論で用いた概念に置き換えるならば、「信じる」ということは、「信じる」ことによって成立する(と想定される)「事実」の中に、守られるかどうか未だわからない「約束」を書き込む。「信じる」ことによって書き込まれた「約束」は、「事実」に対し、まだ実現されていない

39 朝鮮語・朝鮮文化を維持しながらの「内鮮一体」を主張する議論。「徹底的内鮮一体論」とは区別されるものとして分析されてきた。洪宗郁は、植民地朝鮮における「協和的内鮮一体論」を詳細に検討し、「朝鮮という主体の否定は、帝国という主体の否定でもあった」ことから「協和的内鮮一体論」の頓挫は「総力戦体制の不徹底さ」を表したと結論づけた。洪宗郁『戦時期朝鮮の転向者たち——帝国／植民地の統合と亀裂』東京：有志舎、2011年。

40 崔載瑞「朝鮮文学の現段階」『転換期の朝鮮文学』87-89頁（初出『国民文学』1942年8月号）。

41 崔載瑞、同上、91-92頁。

何か、現在の「事実」を脅かす何かを予期させる。つまり、すでに与えられたものを「知る」とことは違って「信じる」ということは、「事実」の成立をいつかわからない未来へと延期させるのであり、デリダはその「事実」＝「法」が延期されるところから「法」そのものの脱構築可能性＝正義を見出したのだ。植民地末期にみられる「信念」が、不可能性と可能性の間において遂行されていたのなら、それによって「事実」に書き込まれる「約束」も「信念」の（不）可能性という観点から捉えることができるはずである。

崔載瑞の『転換期の朝鮮文学』が、単に「国民文学」の理念を語るためのものではなく、その題名通り、根本的には朝鮮文学を語るためのものであったことを見落としてはいけない。「朝鮮文学の現段階」という文章の中で崔載瑞は、いわゆる「協和的内鮮一体論」³⁹のような議論を展開する。その内容は要するに「朝鮮文学は九州文学や東北文学や乃至は台湾文学等が持つ地方的特異性以上のもの」を持っており、したがって「朝鮮文学の概念を拡大」すれば、「創造的能力を生かして新日本文化の建設に寄与」できるというものである⁴⁰。ここで言われる朝鮮文学の「創造的能力」こそ、本土で発せられる「ナチス張りの民族純血論」を懸念していた崔載瑞が「内地の評論家が国家や民族を論ずる場合、一応朝鮮と云ふものを念頭に置いて貰ひ度い」と訴えた根拠である。朝鮮文学がその「創造的能力」を日本文学の中で生かすということは当然、朝鮮文学が日本文学における一個の地方文学になることを意味する。崔載瑞にとってそれは、朝鮮人が日本人になることと同じく、朝鮮文学の「信念」によって可能になる。しかし、崔載瑞がそこで、「信念」を促すことからさらに進んで、朝鮮文学の「信念」が有意義になるための条件までを提示していることは注目に値する。

先づ第一に日本文学はより広い眼界とより高い理想性を持つべきであらう。異つた伝統と習俗と生活感情を持つ朝鮮の詩人や作家を自己のものとして採入れるためには日本文学はもつともつと大きい視野を用意せねばなるまい。これは台湾についても云へることであり、又いづれ満洲についても同じやうなことが起るであらう。次に日本文学は新附の民族がその中で充分自己の創造的能力を発揮し得るやうな、尚進んでは創造的意欲を刺戟されるやうな高い生き／＼した理想を常に持つてゐなくてはならぬ。それには日本国家其ものが常に高い道義性を堅持することが必要であり、その意味に於て小磯総督が就任劈頭に道義朝鮮論を高く掲げられたのは文化的に見ても深い意義があると信ずるものである。⁴¹

「より高い理想性」「常に高い道義性」は、簡単に言うと「信念」によって決断した朝鮮人を「抱擁」できる寛容さを意味する。「日本は如何にして異民族を抱擁しつつ而も日本文化の純粋性を維持すべきか」と問うた崔載瑞は「一方その純粋化の度を益々高めると同時に、他方その広大の範囲を益々広げる」ための「試金石」として朝鮮文学を位置付ける。「天皇帰一」と「八紘一字」の間に置かれるもの、「それでこそ朝鮮文学の転換も意義がある」という⁴²。

崔載瑞は、「信念」を通じて「事実」＝「国家」＝「日本」を未だ実現されていない「より高い理想性」「常に高い道義性」へと遅延させる。デリダの言葉で言うと、「事実」としての「法」に、守られるかどうか未だわからない、したがって「事実」を不可能にする「約束」が書き込まれているのである。

一つに帰するとは何でありませう。御稜威の下で両民族が合体することです。如何にして、又どう云ふ形式で？具体的には未だ誰にも判つてゐないと云ふのが本当でせう。〔……〕たゞ我々は両民族が一に帰すると云う信仰（さうです、それは信仰です）を堅く持つて居ればよいのです。⁴³

「如何にして、又どう云ふ形式で」叶うかまだわからない＝まだ叶っていないと語るための論理的装置こそ「信念」である。「信念」はここできさに間——「事実」としての「天皇帰一」と「約束」としての「八紘一字」の間——に置かれる。「信念」のこのような位相は、崔載瑞のみならず、また植民地と本土を問わず、様々な「転向」の言葉⁴⁴から見出すことができる。そこに植民地特有の要素があるとすれば、朝鮮（文学）が「信念」の担い手として強調されている点であろう。そして、「信念」の担い手が限定されるその瞬間に、植民地的「信念」の限界が露呈する。

繰り返すがここで言われる「信念」は、あくまでも「事」後的であるがために、国家の合理性から自由ではない。さらに言えば「事実」が確定されたところで抱かれる朝鮮（文学、人）の「信念」は、「神秘的」であるどころか、朝鮮という明確な主体が明確な目標——朝鮮を保持する——の下で行う実践であり、したがって帝国の主体化に対して根本的なアンチテーゼではあり得ない。見返りを期待する「信念」はもはや「信念」とは言えず、国家と国民の間の交換様式⁴⁵に回収されるからだ。それが、朝鮮以外の植民地に対して朝鮮がもつ特権性を語っている場合はなおさらである。朝鮮文学に内在する、九州文学、東北文学、さらには台湾文学にはない「創造的能力」こそが、日本文学をより高い理想に導くという論理は、日本こそが西洋の近代に対抗でき、またそれを乗り越えられるというイデオロギーと構

42 崔載瑞、同上、94頁。

43 崔載瑞「学徒出陣をめぐって」『国民文学』1943年12月号。

44 註32を参照。

45 柄谷行人は「交換様式」の観点のうちに、資本＝ネーション＝ステートに対する批判的視座を見出す。柄谷は、ネーションを作る交換様式A、国家を作る交換様式B、資本を作る交換様式Cを区別し、これらの交換様式に回収されない互酬的＝相互扶助的な関係を模索する。本稿で呈示した「信念」は柄谷の議論に即すならば、交換様式Bに当てはまる点で、すなわち植民地人の服従（「信念」）が国家による植民地人保護（朝鮮的アイデンティティの保持）との交換を構成する実践であるという点で限界をもつのである。柄谷行人『帝国の構造——中心・周辺・亜周辺』東京：青土社、2014年、23-29頁。

46 ジョン・ソルヨン、前掲論文、376-380頁。

47 李慧眞、前掲論文、279頁。

48 植民地末期の思想的状況を「未来」に対する認識との関連で論じた研究としてJanet Poole, *When the Future Disappears: The Modernist Imagination in Late Colonial Korea*, New York: Columbia University Press, 2014がある。彼女は、植民地末期を「暗黒期」と捉える従来の傾向に、1945年8月15日に植民地的状況から「解放」されるということをすでに知っている現在の観点が影響していると指摘し、植民地末期の知識人の実践を、未来を失った——「解放」されるという未来が未だ存在しない——ところで代案的な「未来」を切り開こうとしたものとして分析した。

49 崔載瑞「国民文学の立場」前掲、116-120頁。

50 松浦寿輝「国体論」小林康夫・松浦寿輝編『メディア——表象のポリティクス』東京：東京大学出版会、2000年、317頁。

造的に類似している。つまり、朝鮮が帝国の支配下に置かれた他の地域に対する優位を主張し始める瞬間、帝国のイデオロギーと植民地のイデオロギーは、主体形成の企てとして、完全に一致してしまうのである。

したがってこのような「信念」を、また「事実」を未来へ託す「遅延装置」としての朝鮮文学を、「帝国の論理を内側から破壊するもの」⁴⁶、あるいは「国民国家の想像的地理学を超えようとする冒険」⁴⁷であったと評価することは難しい。また他方では、あらゆる「信念」の在り方を抵抗の失敗とみなすこともできない。「信念」を限定づけることによる不可能性は、そのまま「信念」の不可能性を意味するものではなく、「信念」が書き込んだ「約束」は常に未来に託されたままでありつづける——我々には判断することができない——からである⁴⁸。朝鮮人の「信念」は、朝鮮における「日本」を基礎づけ、可能にする。同時にそれは、「法的」には規定事実である「日本」を未だ成立していないものへと遅延させることによって「日本」、すなわち国家を常に不可能なものとして表象する。植民地期の朝鮮にみられる「信念」というレトリックは、このようなアンビバレンスの中で捉えてこそ、主体形成をめぐるより複雑な問題系へと拡張しうるのである。

4. 結びにかえて——朝鮮文学の(不)可能性の行方

以上の議論において本稿は、植民地末期に出された崔載瑞の文章を中心に、「事実」=「国家」=「日本」を「知る」ことに対し、「信じる」ことが占める位相を検討した。従来、専ら「反知性」「非論理」の所産として理解されてきた「国民」になることへの「信念」は、「知る」ことによって同語反復的に構成される「事実」=「国家」=「日本」を未来形として遅延させるレトリックを成り立たせていた。しかし、朝鮮文学はこの「信念」の主体として特権化されることで、「帝国」を遅延させながらも可能にした。これが本稿の議論が導き出しうる結論である。

本稿でも繰り返し強調したように、「知る」ことと「信じる」ことの間で形成される思想の空間は、植民地期の朝鮮に限られたものではない。崔載瑞は、内地人は「自然に無理なく国民的立場に自己を切換へることが出来」るため、内地では「国民文学」論が朝鮮ほど盛んでない⁴⁹と論じた。しかし、「国民文学」論の裏付けとなる「国体」概念の本質的な曖昧さ⁵⁰は、植民地朝鮮のみならず、本土の知識人たちをも「信念」へと導いたはずであり、また結果的にそれは「本土の言説」と括ることができないような多様なスペクトルを呈したで

あろう。したがって植民地末期の言説を可能性と不可能性の間において論じる視座は、普遍性をもつ、というより、特権性をもたない。アイデンティティの問題を時間化し、国民に、民族に到来するであろうメシア的瞬间を潜在態として描くことこそ、ナショナル・アイデンティティを作り上げようとする近代文学全般の本質であるからだ。それ故、朝鮮文学を可能性と不可能性の間において思考することに特有の意義があるとすれば、それは解放後、すなわち朝鮮文学が「事実」と化した以降の朝鮮文学の在り方を問いに付すというパースペクティブにおいてである。

解放(1945年8月15日)から政府樹立(1948年8月15日)までの3年間を不確定性の時空として語ることは、多くの場合植民地末期との関連において或る重要な事柄を看過する。国際法上の国家が成立していなかったとはいえ、そこには「事実」=「民族」=「朝鮮」の連関がすでに前提されていたからである。たとえ解放後の状況が複数の「可能性」同士の対決や無限なる政治的変数に満ちた時空にみえようとも、それらの対決、変数は、端的に言えば擬似的——本論で用いた表現に換言すれば「事」後的——である可能性が高いということだ。実際、解放直後に噴出した知識人の自らの「親日」行為に対する自己批判⁵¹は、「信念」を寄せるべき「民族」が想定されていなければ成り立たなかつただろう。しかしまた、「民族」への「事」後的「信念」があらゆる政治的イデオロギーに先立っていたということも指摘しておかねばならない。植民地末期の「信念」がそうであったように、「解放」後における「信念」もまたイデオロギーに先立つ「神秘的」な起源としての位相を占め、「民族」より限定された主体(「大韓民国国民」)を想定する新たな国民国家のイデオロギーに対するアンチテーゼとして機能したのである⁵²。

ここまでくれば、「信じる」ことの政治性は、その主体をいかに限定づけるか(限定づけないか)という点に存していることがわかる。そこでは、絶対的に開かれた状態も、閉ざされた状態も存在せず、より開かれた、より閉ざされた状態のみが問題となる。その後の朝鮮文学は、いかに閉ざされ、また開かれていだろうか。その解明にはさらなる時間を要するだろう。

51 金允植『解放空間における韓国作家の民族文学創作論』ソウル:ソウル大学出版部、49-87頁。

52 南韓単独政府樹立後における民族概念と国民概念の拮抗については、拙稿「民族と国家の間——1950年代の韓国における「東洋」論を巡って」東京大学修士論文、2015年にて詳細に検討した。